

「不従順の子ら」

エペソ人への手紙 2 : 1 - 3

May.15.2022

エペソ人への手紙 2 : 1 - 3 (パウロ)

Preface

今朝私たちが考えを巡らしたい聖書の言葉は、「不従順の子ら」という言葉です。

エペソ書 1 章の最後の部分で、使徒パウロが私たち読者に知って欲しいと願ったのは、神の大能の力でした。

神様の大能の力が具体的に私たちの世界にどのようにあらわれ、また私たち人間にどのように働いたのかを、イエス・キリストの死と復活をもって証明し、またそのイエス・キリストが私たちのかしらとなり、私たちがそのからだとなったという恵みをもって、パウロは神の大能の力を説明してくれました。

そして 2 章に入って来ますと、今一度改めて、もう一步深く突っ込んで、「私たちがどれだけ酷い存在だったのに救いを与えられたのか、私たちが頂いた救いがどれだけすごい神様の大能の力なのか」ということについて話し始めます。

ただその話の内容は、赤裸々で、露骨です。

私たち人間が一体全体どれほどに希望のない存在で、私たちが陥っている問題がどれだけ深刻で、その深刻な状態を認めることもなければ、認めたところでその深刻さから脱出する術も持っていないという心痛む事実と向き合うことを求めてきます。

なぜなら、この心痛む事実の確認がない限り、恵みが恵みだと思えないからです。

このパウロの実直な語り掛けを聞いていますと、神の恵みによって罪赦され救われたにもかかわらず、ともすると、未だに我を忘れてよだれを垂らしながら、この世の流れや欲のままに生きること、肉と心の望むことを行うことに魅力を感じて、望遠鏡を使ってでもそちらを羨ましそうに覗き見ている自分自身、または私たち自身の姿を思い知らされる気が致します。

Part One

聖書が私たちに話してくれる最も大事な内容のうちの 하나가、「私たちすべての人間は、生まれながらにして、本質的に中立的な立場で生まれてくることはない」ということです。

前回のメッセージで 3 節の内容を見ましたが、「自分の肉の欲のままに生き、肉と心の望むことを行う、生まれながら御怒りを受けるべき子ら」が私たちです。

そして、この3節にある「生まれながら御怒りを受けるべき子ら」という言葉を、2節では「不従順の子ら」、「自分の背きと罪の中に死んでいたこの世の流れに従う不従順の子ら」と言っています。

つまり、生まれながら御怒りを受けるべき子らは、不従順の子らでもあるということです。

では、誰に対する不従順で、従順なのか？

神に対する不従順で、従順です。

使徒パウロは、主イエスを信じず救いに与っていない者たちの最も根本的な姿勢が何かと言いますと、不従順だと言います。

神を信じない私たち人間の最も野太い属性が、神に対する不従順です。

そして、神を信じるように変えられた者たちの最も際立つ特徴が、神に対する従順です。

私たちは元々、生まれながらにしてどこか精子と卵子が受精する前から、神様に従順するという事がはなから欠落してしまっている存在です。

もっと言いますと、私たち人間は本質的に、神様側に立つということが嫌で、嫌いな生き物です。

どれだけそうかと言いますと、「光が世に来ているのに、人々は光よりも闇を愛した」とヨハネの福音書で言っている程に、光よりも闇を愛しているのが私たち人間の本質です。

ヨハネの福音書3：19－20（パワポ）

ここで言う「悪を行う者」とは、生まれながらの人間、つまり、神に不従順な私たちすべての人間のことを意味する言葉です。

私たちすべての人間は、生まれながらにして、自分の行いが悪いことを本能的にある程度感じてはいますが、認めようとはしません。

そして、まことの光である神様の下へと、神のかたちであられるイエス・キリストというまことの光の下へと来る代わりに、人の手によって木や石や金や銀で作られた偶像ばかりか、人の手によって作り出されたありとあらゆる物の前に跪き、拝み、食欲を愛し、金銭を愛し、ふらちでやましいことに心惹かれ、結果的に光を憎み、闇を愛します。

意図して闇を愛しているならば、まだ何かの施しがあるかもしれませんが、闇を愛せずにはいられない属性が私たちの中にあり、結果的に意図して闇を愛するようになってしまっているというのが私たち人間の本質です。

燃やされ尽くされてしまうことを分かってか分からずか、虫が自然となめまかしく光る火に向かって行くように、まことの光であられる神とは正反対の偽物の光である闇を愛してしまうのが、私たちの本質です。

闇を愛することに理由はないですね。

自然とそちらに体が向いてしまうのが、私たちです。

Part Two

雑誌や漫画などでこんな絵を見たことがありますが、私自身他人事ではありません。

愛しているはずの妻が直ぐ隣にいるにも関わらず、綺麗だと思ふ女性が近くを通ると、掛けていたサングラスのレンズを貫いて目が飛び出して、そのレンズが地面に落ちている絵です。

もちろんそうだからと言って、隣にいる奥さんと急に別れてその女性と暮らし始めるとかではありませんが、これが、普通の男の性です。

イエス様が、実際に行動に移さなかったとしても、「情欲を抱いて異性を見る者は誰でも、心の中で姦淫を犯したのです」と、私たち自身どうすることも出来ない罪な闇を愛している体質の確信を突くようなことを仰いましたが、大学生の頃クリスチャンになって、これほど心に刺さった言葉はありませんでした。

聖書は初めから最後まで、私たちの闇を愛する姿を露骨に、一切包み隠さず述べていますが、その中でもこれほどに私たちの闇を愛する巧妙さを表している言葉はないなあと私自身思っているのが、申命記の言葉です。

申命記 28 : 53 - 57 (パワポ)

どんなに上品で、清貧で、最も優しい人格者であったとしても、自分が窮乏すれば、我が子を食らうのが私たち人間です。

「そんな馬鹿な話！」とお思いになるかもしれませんが、実際に、この聖書に記されている神の言葉を守り行わずに、主なる神様に従わない歴史を繰り返したイスラエルの民たちは、「まさか自分たちがそんなことをするなんてあり得ない！」と確信していた我が子を喰らうということをしました。

食べているインスタントラーメンを「ひと口頂戴」とねだる我が子にもったいぶって、「ダーメ！」と言って子供と小競り合いしている私自身、彼らイスラエル民族と何ら変わることはないなあと情けなくもあり、怖くもあります。

子供を目の前にしながら、我が子に目をやるどころか、スマホやテレビに気をとられていることを当然のようにしていることも同じかもしれません。

生まれながらに闇を愛する体質を持っている人間が作り出した多種多様な雑多な価値基準で、子供を、孫を、仲間を、同僚を、夫を、妻を、人を判断し、選

別し、見下し、褒めたり、称えたりすることも、何ら変わることはないでしょう。

人は、訓練や修行や人生経験によって聖人君子になったり、おしとやかになったり、優しくなったり、上品で、エレガントで、高貴になるなんてことは天地がひっくり返ってもないということを聖書はあからさまに教えてくれます。

「いや、そんなことはないよ」と私たちが思うならば、それは装っているだけですし、嘘をついていることになりまして、自分のこと、人間のことをまだ分かっていないということになるでしょう。

もし私たちが、「どれぐらい信仰生活を送れば、私の心に綺麗な思いだけが湧き上がってくるのだろうか」と考えるならば、めっそうもありません。

そういう考えは、ある意味人間の本質をまだ知らないことになるでしょうし、人間は、最後の最後まで、泥水のような汚水が溢れ出てくるばかりです。

だからこそ聖書に聞き、読んでいますと、「正に聖書の御言葉こそ、生きて働き、力があり、両刃の剣よりも鋭く、魂と霊、関節と骨髄を分けるまでに刺し貫き、心の思いやはかりごとまで綺麗さっぱり見分けるということは本当だ！事実だ！」と、家の奥の自分の部屋に入って膝を打ちたくなります。

聖書ほど、人間について真っ当に語っているものはございません。

聖書の神様ほど、人間について知っておられる方もおられません。

私たちをお造りになった方ですから、当然と言えば当然ですが、その当然を受け入れることが出来ない、不従順な存在が私たち人間です。

Part Three

また不従順と言いますと、言うことを聞かない程度のとても消極的な態度や姿勢を私たち思い浮かべるかもしれませんが、ここで言う“不従順”とは、とても積極的な姿勢です。

元来、人は積極的に、神に対して不従順でありたいと思います。

そして、神に対して不従順であるということが、結局何との戦いかと言いますと、「権威に対する戦い」です。

例えば、親が子を叱っても、その叱ったことゆえに、親が親であることを認めないなんてことは普通はありません。

叱られても、親は親です。

しかしこれが霊的な問題となりますと、父なる神がまことの親であるということは認められませんし、神の権威なんか認められません。

でもこれが、キリストを信じ神を信じる者と変えられますと、神の権威を認めるようになります。

だからと言って、いつもいつも神様に従順であるかと言いますとそうではありません。

不従順な時があります。ほぼ不従順だと言ってもいいかもしれません。

ただ、不従順だからと言って、神の権威を認めたくないとは与えられた信仰ゆえに思えなくなります。

しかし、神を信じない者の不従順には、神の権威を認めるということが一切伴いません。

同じ不従順でも、信じる者の不従順は、神から逃げるという不従順であり、信じない者の不従順は、神様の代わりに自分が王となって、権威者となっているという大きな違いがあります。

例えば、主日礼拝を守るということにおいて、信じている者が主日礼拝を守らない時の気持ちは、「礼拝を守らなくちゃいけないことはよく分かっていますが、すいません、今日だけ、今日一日だけちょっと抜けさせてください」という神を意識した神からの逃亡ですが（ヨナのように）、

信じていない者にとって礼拝を守らないことは、「礼拝なんか守る必要もないし、神なんていう者がどこにいるんだ？ 私が、私の思うままに生きるのが私の人生だ」と、自分が最高の権威者として礼拝を無視しているということです。

その姿勢、向いている方向、視線が全く違います。

同じ不従順でも、一方は権威の中での逃げであり、一方は権威との戦いです。

この神の権威が無視されていることが、どれだけ世に蔓延しているのかをいくつか具体例を挙げながら考えてみたいと思うのですが、まず一つ目は心理学という学問を例に挙げたいと思います。

Part Four

心理学に関する書籍がいくつも出ていて、その分野の本がベストセラーになることもちょくちょくある昨今、大学や研究所や医療の分野で研究している方たちだけの学問ではなく、ある意味世間一般の方々でも接しやすい分野になっている学問でもあると思いますが、どうして心理学というものが登場してきたのか、その起源をご存知でしょうか？

現代では、キリスト教心理学という聖書や信仰に基づく心理学もありますが、元々は、「人はどこまでも悪で、絶望的だ」と教える聖書の人間観に対する弁護・反発として出て来た学問が心理学です。

即ち、心理学は、人はそんなに悪い存在ではなく、人には可能性があるという主張から始まります。

でも聖書は、人間には根本的に可能性は無いと言います。

社会的に恥ずかしいところ何一つない立派な人であったニコデモに対しでさ

えも、新しく生まれなければならないと言うのが、聖書です。

立派なニコデモさえもそうなのですから、立派でない普通の人なら、なおさらです。

でも、一般的に心理学ではこう主張します。

私たちが、私たちの子供たちや一人の人間に対して、ちゃんと接してあげることが出来なかったから、その反動や後遺症として自暴自棄になったり、悪くなるのであって、人間の心をよく理解して、ちゃんとしてあげれば、良いものが出てくる可能性が十分にあるというのを追跡するために作られたのが心理学です。

もちろん、それすべてが間違っているとか、役に立たないとかではありません。

神様の一般恩恵の中で有益なこともたくさんありますし、事実、聖書に通ずる良いものがあるがゆえに、先ほども言いましたようにキリスト教心理学という学問が出てきました。

心理学に始まり、教育学にも影響を及ぼしながら、人と接する上で無駄な暴力が、実際世の中や私たちの生き方に蔓延しているという事実を教えてくれた功績はとても大きいと思います。

しかしながら聖書は、厳しく叱ってでも、時には叩いてでも、ぶっ飛ばしてでも、怖がらせてでも、間違ったことをしないように教えることを勧めますし、実際に神様は、私たち人間と接する時、厳しく叱り、時には叩き、ぶっ飛ばし、怖がらせてでも、その行いを正し、間違った方向へと行かないようにしなければならぬほどに罪人であり、罪に毒されていることを明確に指摘しています。

これは、私たちにとって本当に大きな戦いです。

私たちが子供を育てる時、特に、信仰的な問題について私たちがやらなければならない最も大きな戦いのうちの一つでしょう。

私たちは基本的に子供が泣くことを見ていられません。

子供たちが痛んだり、苦しんだりすることを見ることほど、辛いことはありません。

しかしそれよりも、罪がもっとさらに恐ろしいものであることを覚えなければなりません。

人間がどれだけ怖いほどに罪に汚染されていて、罪の深い根っこを持って生まれてくることを理解して、教えなければなりません。

ですが、私たちはそれをしません。

なぜならば、(人の可能性を説く)世の流れに私たちも同調しているからです。

聖書の言う人間についての記述よりも、世が人間について説明していることに、私たちの耳を傾けています。

これは、深刻な問題です。

神の言葉をもって、人間や世を見るのではなく、人の言葉をもって、人間や世を見ています。

正に、神に対する不従順です。

Part Five

そしてこの神に対する不従順が、どのような様相で私たちに表れるかと言いますと、私たち人間が被造物であるという事実、神によって造られた存在であるという事実を“否定”するという形で表れます。

人間が被造物であるということを否定するとは、神がおられるということが我慢ならないということです。

人は、神様がいらっしゃるのか、いらっしゃらないのかを論理的に説明することなんかしません。 まあ出来ないですね。

「神がおられるということを信じない信仰よりも大きな信仰はない」と言われる程に、本能的に嫌なんです。

「神がない」ということを信じるの方がよっぽど難しい世界に生きているにもかかわらず、人間という存在の上に、何か他の世界や権威者や命令を下すお方がおられるということが嫌で仕方なく、我慢なりません。

私という人が誰かの恵みの対象で、助けを求めなければならない権威ある存在がいるということが、生まれつき嫌だということです。

霊的世界があるということをなぜ嫌がるのか？

それは、人間の頭で理解できない世界があるということが我慢ならないからです。

皆さん、こういう童話を聞いたことがあると思います。

あるところにアマガエルの親子がいたのですが、子供のカエルが野に出て行って牛を見ました。

そして、家に帰ってきた子ガエルが、お父さんガエルにこう言いました。

「お父さん、今日僕ね、とても大きい生き物を見たんだよ！」

「どれくらい大きかったの？ これくらいの大きさかな？」と父ガエルが自分のお腹を膨らませました。

「ううん、言葉にならないくらい大きかったの。」

「じゃあ、これくらい、もっと大きかったのかな？」と言いながら、父カエルがさらにお腹を膨らませました。

最後どうなったかは皆さん想像がつくと思いますが、このアマガエルのように人間も、自分が作った物や発見した物よりも大きな存在があるということを認めることが出来ません。

私たちの範疇を超えた世界があり、私に説明できず、私が掴むことも出来ないものがあるということに我慢なりません。

これが、人間の持つ所謂プライドです。　ものすごいプライドですね。

私の力で、私の能力で、私の理解力で、必要なものがあれば私がそれを作り出すことが出来る能力者であるということです。

もし出来ないとなると、これまた我慢なりません。

なので、聖書の言葉を誰かに伝えた時の最初の反応は、怒りです。

生まれながらの人間は、誰でも当然のように嫌がります。

もし嫌がらなかったら、その人はすでに恵みを受けている人ですね。

私たちが不従順の子らであるということがどれだけ深刻で、どれだけ恐ろしいことか分かりません。

Part Six

またさらに、不従順の子らである私たち人間は、十分に自分の力で善と悪を意のままに選択することが出来るという妄想を持っています。

善は誰のものですか？　神のものです。

では、悪は誰のものですか？　サタンのものです。

善は神のものであり、悪はサタンのものですが、では、人は誰に属していますか？

ここでいつも私たち人間は、“自分に属している”と言います。

つまり、「私が悪を行うことも出来るし、善を行うことも出来る選択権を持つ中立的な有権者だけれども、こっちからは私を選びなさいと言うし、あっちからも私を選びなさいと言っている」という勘違いをしているのが、生まれながらの人間です。

でも聖書は断固として、「あなたがたは恵みの下にあるか、もしくは、のろいの下にあるかのどちらかしかない」と言います。

私たちは、「私の人生と私という人と私の運命に、私が責任を持つ存在だ」という考えを持っていますが、聖書が言うには、「私たちは、サタンが麦のようにふるいにかける存在だ」と言います。

イエス様がペテロに言った言葉を見てみたいと思います。

ルカの福音書 22 : 31 (パウロ)

私たちは、サタンの手の内で完全に踊らされる、ふるいかけられる存在です。

誰もが生まれながらにして、悪霊どもの、サタンの手の内にあります。

世の流れを作っている空中の権威を持つ支配者に従っているばかりか、その手の内で踊らされているのが、生まれながらに不従順の子らである私たちです。

前回も言いましたが、サタンは巧妙です。

私たちが奴らの手の内にあるなんてことは、これっぽっちも思わせません。

あたかも、私たちの運命と私たちの存在と私たちが何でも決定することの出来る存在のような自由と権威を持っているという妄想と錯覚の中で生きるように導いています。

だから「イエス様信じませんか？」と伝道しますと、「束縛されるから嫌です」という反応が出てきます。

「イエス様を信じなければ自由だけれども、イエス様信じると縛られる」と思っちゃうんです。

「真理はあなたがを自由にします」と、思えないんです。

高校生の頃、大きな豪華客船に乗って中国の高校生たちと交流する洋上セミナーという東京都のプログラムに参加したことがあるのですが、4泊5日かけて船に乗って中国に行くんです。

で、その大きな船のデッキでバスケットボールをしたり、海を眺めたりして時間を過ごすのですが、船の先っぽから大きな海を見たくて、船の船首に向かって広いデッキを歩いて行っても限りなく前に歩いていくことは出来ません。

船首に向かって広いデッキを歩いて行きますと、海に落ちたら危ないので、それ以上行けないように障害物が塞いでいます。

もしそれ以上進み、さらに船首も超えて進めば、そこは海です。

船の横に向かって行っても、同じです。そこは海です。

では、それを超えて海の中に落ちた人の方がもっと自由で、船に乗っている人は束縛されているのでしょうか？

違いますね。船に乗っている人こそ自由ですね。

なのに、あたかも私たちは、海に落ちた方が自由だと意地を言い張っているように生きていましたし、そういう人々が隣人である中で生活をしています。

そして今も、不幸にも船に乗ってしまったために海に飛び込むことが出来ずに、サメに噛まれてあっち行き、こっち行きしている人を見て、「なんて、楽しそうなの！」と羨ましがっています。

食事の時間を知らせるチャイムを聞いても、食堂に降りていくこともなく（御言葉という食事を取ることもなく）、デッキの上で、「ああ、もっと後になって船に乗ってれば、あのサメと一緒に楽しく遊べたのに！」と悔やむ始末です。

私たちが神様の御旨に適うことを行うために召し出され、あそこからここに、海から船の上に移されたということをはっきりと知り、私たちが決して途切れることのないとんでもない誘惑の中にあるのかを忘れていることを確認させるために、聖書はこの大事な事実をこのように（聖書を指さしながら）、両刃の剣のように鋭く切り割って私たちに説明してくれています。

Conclusion

以前の私たちは、あちら側にいました。

でも今は、違います。

ですが、あちら側が私たちの本性なので、いつでも私たちの奥底から汚水のような泥水がいくらでも湧き上がってきます。

そして、その汚水の中でまみれながら無邪気にはしゃぐことを、とてもとても羨ましく思います。

なぜそうなのでしょう？

たぶん、私たち自身が一体全体どんな存在なのかを神の言葉によって確認することが出来ておらず、また神の恵みのうちに留まり、その豊かさを享受することを知っていないからなのかもしれません。

だからパウロが祈るんです。

それを見分ける心の目がはっきりと開かれる必要がありますし、見分けたならば、船の上にいる自由を所有し、満喫しながら勝利するところへと自らの意思をもってキリストという船とともに進むのです。

昼夜問わず、船を降りたり乗ったり行ったり来たりして、船に乗れていることの特権を失わないように、船に乗り続けましょう。

最後に第一テモテ 4 章の御言葉を読んで終わりたいと思います。

テモテへの手紙第一 4 : 1 - 10 (パウロ)

男女の結婚とか、食べ物を食べることという人の営みの最も基本的なことに於いてでさえも、俗悪で愚にもつかない作り話を作って、人々の心を奪い、信仰から離れさせ、人を貶める時代が今の時代です。

心奪い、信仰から離れ、愚にもつかない作り話に、皆さんハマっていませんか？

皆さんの周りに、キリストや神の言葉から引き離すようなことはないですか？

十分に気を付けてください。

朽ちていくこの肉体に関するほんの少し有益なものは多種多様雑多にあります
すが、それよりも、すべてに有益である神の言葉と祈りと敬虔に生きてください。

信じる人々の救い主である生ける神に、望みを置いて生き、キリスト・イエス
の立派な奉仕者になってください。

お祈りいたします。

祝祷：第一テモテ 4：7